

# 風土



さくら蓼

—風土二十九回鍛錬会—

神蔵器

笛の音や海にも月の道ひらく  
大寺に日向をのこす穴惑ひ  
枯蟻螂己の影の上を這ふ  
行く秋や「相生の杖」われに欲し  
峠口蕙一枚小豆干す

とんぼ飛ぶ地べたの花のごとくわれ

紅葉且つ散つて峠の十団子

馬脊うまごも歴史の一つあたたかし

十月や巣箱の穴のこちら向く

まなこより冷の集まる烏瓜

一つ上の亡妻へ土産の木の実独楽

とにかくも死なざりしかば桜蓼



# 竹間集

同人作品



無題

小林清之介

吾が星の蠍座さそりざしづむ秋今宵  
鴨ひよの下をみな二人の長話  
ポイ捨すての煙草が増えて秋めきて  
対米軍の防中事案也。  
防音戸夜毎の虫を隔てたり  
行き合ふは犬連ればかり秋夕べ  
素十忌の杖止め蟬がまだゐるか  
秋寒の電気リハビリ温としや

醉芙蓉

田村すゝむ

送り火の明るき空へ亡妻還す  
クレヨンの白だけ残る夏休  
午後五時の夕日の色の醉芙蓉  
空近き田より千枚水落す  
一陣の風と遊べる蕎麦の花  
秋燕や言葉の語る丸ポスト  
霧の緞帳喝采もなく上りけり

黙読の

瀬戸

悠

鱒のひれひらひら厄日過ぎてをり  
うらがへる波の穂しろき秋祭  
浮き沈む水母に秋思ありにける  
飼ひ馴らす血鯛真鯛や空高し  
ハコフグの顔の正面秋淋し  
高曇る空あり鳥の渡りぬる  
黙読の萩に降る雨知つてをり

新生姜

塩出博久

地下鉄でデパート巡る西鶴忌  
封切つて紅茶の香り小鳥来る  
妻留守の厨にメモと新生姜  
家族の名並ぶ表札鶏頭花  
寝ころべば涅槃の思ひ大花野  
椋鳥や旧家の護る屋敷林  
新米着くいぶりがつこの添へられて

菊大輪

高橋 邦夫

病むわれにあつまる霧や車椅子  
秋扇荒く使ひつ女医本音  
大輪の菊を見舞ひの句友かな  
病廊の能面われに語る秋  
燕帰る大病院の時計台  
遺影には遺影の月日鳳仙花  
久に見し秋の街々退院す

秋彼岸

代田 青鳥

鶏の遠出してをり秋彼岸  
村一つ消したるダムや草の花  
秋彼岸上野の杜に絵本市  
院長の屈伸体操良夜かな  
千枚田登れば十月桜かな  
灯の消えて山の厨房水澄めり  
茸飯多目に炊いて一人なり

ねこじやらし

関根 洋子

野を恋ふや花瓶の中のねこじやらし  
奥の間へつくつくほふしの風送る  
下駄箱の四角の闇やつづれさせ  
とんぼうに出入り自在の門一つ  
現役と余生のあはひ吾亦紅  
曼珠沙華八百屋お七は炎の中に  
今宵また掴みそこねて流れ星

文学苑 東海の潮来——蟹江

— 小野寺節子 —

東海の潮来で泣いてゐる子亀  
佐屋川の中で噴水大活躍  
花は花葉ざくらは雲呼んでゐる  
三三五五葉ざくらの風七曲り  
お待ちしてましたとばかり蟬しぐれ  
蟬しぐれ此処は文学散歩道  
汗涼し「吉川英治」の句碑にあやかりて  
夏草や英治の句碑に背伸びする  
土手に立つ句碑をあやせる早星  
汗拭ひ句碑の英治と握手する

葭切や人一人ぬぬ舟溜り  
夕涼み誰とわたるの月見橋  
大波小波の青田を膝に文学苑  
二十六基の句碑は語り部落し文  
秋を待つ句碑面々の深まなざし  
サングラス外し龍太の句碑に佇つ  
秋隣居並ぶ句碑のうらおもて  
句碑を抱く鹿島の神の御目涼し  
秋ざくら句碑の裳裾と見てとりぬ  
句碑集ひ名<sup>つ</sup>月<sup>き</sup>待つ杜のたたずまひ

# 山河集

同人作品



神蔵  
器選

蕎麦の花秩父は札所めぐりかな

遠藤道遙子

八月を油絵にせば赤と黒

墓碑銘に肩書のなし草の花

ベルリンの道に迷ひぬ秋の暮

芦の湖に逆富士現れ水澄みぬ

列柱の上の列柱虫の秋

中村 洋子

山霧の切れ目にコロナ観測所

秋の昼蔵の門さしに行く

葉生姜の匂ひ立ちをり朝の市

子規記念野球スタンド蜻蛉とぶ

どの木にも雨の名残や今朝の秋

土井 三乙

座についてまづ枝豆を二つ三つ

果実酒の封を切りたる白露かな

野分雲山々は背を低うして  
我に流るる落人の血や野分立つ

天麩羅油冷めゆく音や月上る

根岸 善行

崖下の小学校の運動会

水澄みて山河大きくなりけり

光陰を束ねて太し雁渡し

ものかげの正しく在りぬ今日の月

椿の実やうやく己見えてくる

奥山 絢子

降る雨を玉となしたる萩の花

放たれて高からずゆく蜻蛉かな

色鳥や囁く如きフランス語

新松子五浦の沖のとの曇り

◇特別作品（抄）◇

## 身延山にて

曾根 治子

法の山十三里四方秋澄めり  
三門に入る曼珠沙華曼珠沙華  
天井に又造の竜秋闌ける  
竜の目の慈光となりぬ秋日和  
天井絵の真下に坐る秋思かな  
甘露門額縁にして天高し  
唱題に和す一山の秋の蟬  
秋草や十二支を彫る鐘楼堂  
頂上にカール・ブッセの詩秋深む  
展望の彼方此方も霧の中

# 風土独語／神蔵 器



八月を油絵にせば赤と黒

遠藤道遙子

スタンダールの小説『赤と黒』が知られる。貧しい青年ジュリアン・ソレルの野望と挫折、当時の階級社会を批判し、鋭い心理描写など近代小説として高く評価された。彼の墓碑銘には「生きて、書いた、愛した」とあるそうだ。

掲出句の「八月」は実感で、大きく感覚的にとらえている。もし、この句が「七月」であつたら私は採らない。

では、なぜ八月でなければならぬのか。極暑、薄暑、炎暑、炎ゆる、灼くる等は、みな真夏七月の季語で、色で言えば赤ということになる。その点、八月は実際には七月より猛暑の日が多くあつたりするが、問題は暑さだけではない。八月はいくらぎらぎら炎ゆる炎暑の日があつても、どこか七月の炎暑の透明度がない。八月は暑さの中にも、しのび寄る秋の気配か、表面に対する裏、赤と黒が直感されるのだ。実際の景の裏側まで見透し一句に柔軟性と深味を増した。そこに作者の個性、志向するものまでが見えて来る。

どの木にも雨の名残りや今朝の秋

土井 三乙

今年の秋は晴れるか、雨になるとしばしばどしゃ降りだった。しかし本来秋の雨は蕭条とふる雨である。この句の場合も、こまかく降る長雨が夜のまだ暗いうちの上つて、どの木にも雨滴がついてかがやき、少し冷えこんだが、またとなくよく晴れた爽やかな秋の朝になったのだ。生きている喜びが全身にあふれる。

椿の実やうやく己見えてくる

奥山 絢子

「やよひ」句会にこの句が投げられた時、私はたしか一重丸であつた。季語の「椿の実」だけで成立しているこうした句は、どのようににも解釈出来、評価することも出来るので、作者の存念、覚悟が知れたかつた。

句会の数日後、作者から手紙をいただいた。手紙には「冬椿の季語もあるごとく、椿は寒さの中、いち早く花をつけ、その花を散らします。そして椿の実がはつきりと目につくようになるのは、他の実より長く約一年かかります。仙人はこの実をみつけると、地下足袋でぐつと地面に押しつけ、軽く地に戻します。一年乃至二年後『未生』と呼ばれる芽を生い始めます。人の耐える風雪とでも申しましょうか」とあつた。

椿の実作者にとつてたしかに生きている証、私は作者の手紙を読んでこの句に納得した。(以下略)

# 風土集



## 神蔵器選

石段に残る暑さの南禅寺 津山 生田 作

東山三条下る秋日傘

衰えぬ残暑祇園の石畳

秋蝶を連れて山門くぐりけり

大雨の洗ふ彼岸の京都駅

子規庵の水引草や井戸の跡 さいたま

竹生田勝次

秋風や忍者の如く古書肆出づ

水澄みてステンドグラス天に聳つ

水澄みてあなた筑波の二峰かな

独酌は一日のけぢめ新生姜

赤のまま川渡り賃筒に入れ 藤枝

しばかやこ

つくつくし裏表なき風吹けり

朝市や荷に紛れたる男郎花

くろがねの鍍灯籠や露涼し

曝書かな「更級日記」開きゐて

ゐのこづち付けて戻りし猫叱る 津山 生田恵美子

縁側に秋の黄蝶の親しけれ

風立ちぬ蝸螂山を見つくして

きちきちの光飛び込む勝手口

賜日和柄付きブラシの水切つて

天平の蕩波打つ良夜かな 横浜

磯野たか

萩咲けり鑑真和上の墓の道

磨崖仏大き手ぬらす野分かな

明月や管弦の舟浮べたる

秋澄めりこふの鳥の雛空に舞ふ

桐一葉真昼の音を立てにけり 上尾

根岸善行

月の出に重くなりたる木戸を引く

近づいてくる台風に眼鏡拭く

とんぼうが真赤に晴れてきたりけり

梯子より乗りだしてゐる松手入